徳島新聞　平成29年4月22日(土)

健康

新しい免疫療法

進行した肺がんに有効

手術などとの併用適さず

がん何でもQ&A

質問　60代の男性です。咳が続くため、精密検査をしたところ、肺がんと診断されました。最近話題の免疫チェックポイント阻害剤の治療を希望したいと考えていますが、これまでの免疫療法とどこが違うのでしょうか。また、副作用はあるのでしょうか。

軒原　浩
徳島大学病院臨床試験管理センター特任講師
（呼吸器・膠原病内科）

回答　免疫細胞はがん細胞を攻撃することが知られています。これまでの免疫療法は、免疫細胞をいかに活性化するか（攻撃力を上げるか）という戦略で開発されていました。ただ、肺がんに対して科学的に有効性を示した免疫療法は残念ながらありませんでした。

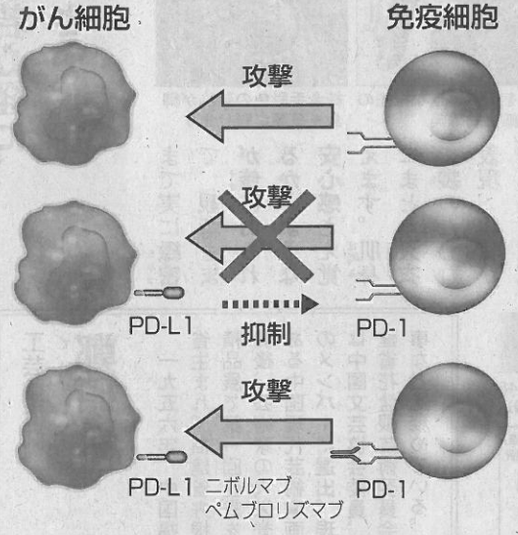
一方、がん細胞はPD－L1という分子で、免疫細胞のPD－1分子に結合することにより、活性化した免疫細胞を抑制し、免疫細胞の攻撃から逃れていることが分かりました。免疫チェックポイント阻害剤は、PD－1とPD－L1が結合するのを防ぎ、免疫細胞がが細胞を攻撃できる状態に保つ薬剤です。現在、肺がんに対してニボルマブ（オプジーボ）とペムブロリズマブ（キイトルーダ）の2つの免疫チェックポイント阻害剤が承認されています。

免疫チェックポイント阻害剤は、転移のある進行した肺がん（非小細胞肺がん）に対して有効性が示されています。手術や根治的放射線療法に適応する肺がんには、免疫チェックポイント阻害剤よりも手術や放射線療法が有効です。これらの治療と免疫チェックポイント阻害剤の併用はお勧めできません。

進行した非小細胞肺がんでは、がん細胞にPD－L1が多い場合、初回治療で免疫チェックポイント阻害剤の効果が期待できます。少ない場合は、通常の抗がん剤治療を行った後の2次治療以降で免疫チェックポイント阻害剤を使用するかどうかを検討することになります。

免疫チェックポイント阻害剤は、これまでの抗がん剤と異なり、悪心、嘔吐、脱毛、食欲不振、骨髄毒性といった副作用はあまり認められません。しかし、頻度はそれほど高くはありませんが免疫関連の副作用（大腸炎、間質性肺炎、糖尿病、ホルモン異常など）が生じる場合があります。免疫チェックポイント阻害剤を使用する場合は、担当医師から免疫関連の副作用に関する説明を十分に聞き、副作用発生時に素早く対応できるように理解しておく必要があります。

（第4土曜掲載）



免疫チェックポイント阻害剤が作用する仕組み

がんに関する質問は徳島がん対策センター〈電088（634）6442〉（平日午前8時半から午後5時まで）へ。